



共生の時代

'08
2月

●発行:グリーンコープ共同理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876



オーストラリアの科学者 **ジュディ・カーマン** さん

1957年西オーストラリア州アデレード生まれ。理学博士。代謝調節・栄養性化学・がん分野で博士号を取得。専門は公衆衛生学。国や州の機関で、がんやエイズの研究に従事する傍ら、農村地域を中心に積極的な講演活動を行い、GM食品の危険性について警鐘を鳴らし続ける。息子と2人暮らし。

プロフィール

母として、科学者として、GM問題に警鐘を鳴らし続ける

昨年11月、初めて日本へ。自国オーストラリアで播れているGMナタネの栽培への動きを止めなければとの思いを胸に飛行機に飛び乗った。

オーストラリアは世界でも数少ないnon-GMナタネの生産国であり、日本は大事な輸出先だ。ジュディさんはGM作物の安全性に疑問を持ち、科学者の立場でこれまでも社会に向けて警鐘を鳴らしてきた。しかし、経済効率一辺倒の政府や業界はGM作物栽培へと傾斜し続ける。ジュディさんの住む南オーストラリア州も例外ではない。事態は深刻さを極めていく。「GM作物による危険に晒されるのは誰? GM作物によって利益を受けるのは誰? よく考えてみればすぐに分かります」。GM技術に隠された本質及び危険性を見抜

いてはいる科学者の目でもみんなに訴え続ける。

今回の訪日を実現したきっかけは、「non-GMナタネ栽培継続」を切望する290万人もの日本の消費者の思い(署名)がオーストラリアに届けられたことだった。それがオーストラリアの人たちの心を衝き動かし、北半球と南半球に離れていても、GM反対への意志は同じだと初めて気付かされた。短い滞在期間に東京と福岡での講演をこなし、いくつかの製油工場を視察した。自国のナタネがどのようにして商品化されているのか、一つひとつ確かめると、食べものとおとして国と国が繋がっていることを実感する。「オーストラリアのGMナタネ栽培を止められるのは日本の消費者です。non-GMナタネを欲しているという声を届けてほしい」。ニューサウスウェールズとヴィク

トリアの2つの州がGMナタネ栽培認可に踏み切る方針を出した。厳しい状況に違いないが、まだ負けたわけではない。グローバルに手をとりあつてこの壁を越えていくために科学者として日夜腐心する覚悟だ。その芯の強さと真面目さは幼い頃から変わらない。

大学時代に恋をし、シンメルマザーになった。やさしく抱きしめるように育ててきた一人息子が昨年自分の人生の進路を自ら決めた。親の願いとは別に自分の意志を貫いた。一抹のさみしさを感じはしたが、今では並走しながら共に生きる仲間としての存在になりつつある。

GM問題を研究すること、家族と共にあること、自分の人生において、どれにも自分らしく向きあいたい。その凛とした表情にオーストラリアの青空が透けて見える。

2007年度

ネグロス・クリスマスキャンペーン
カンパをありがとう!

カンパ総額
11,442,083円
(1/23現在)



2007年11月から12月にかけて取り組んだ恒例の「ネグロス・クリスマスキャンペーン」に組合員からたくさんのカンパ金寄せられました。カンパ金は、JCNC(日本ネグロス・キャンペーン委員会)をとおして、ネグロスをはじめ、アジアの民衆の自立に向けたさまざまな活動支援に使われます。

Contents

- 組合員によるパレスチナ訪問レポート
パレスチナの女性たちの笑顔に光を見た 2・3
- 子育て応援学習会
お母さんがもっと自分を好きになるように
- 国産加工用(ジュース用)トマトの生産を応援しよう 4

長く組合員活動をさせてもらった。昔話を少し。地区活動をしていた頃、牛乳のレンネット実験に使うレンネットを上皿天秤に、分銅をピンセットで載せて量っていた。苦手な私がやると量ったのに、そばにいた息子がくしゃみで吹き飛ばした。

体験田の担当の時、田植え、稲刈り等で何度も田んぼへ行った。「かえるのこわい」と泣いてる子がいるよ」と言われて振り返った。幼いわが娘だった。

送 信

まだ、店舗とか、はるか遠い夢の頃、小さな活動センターを地区運営委員会で立ち上げ、ストック商品の販売や配送品の一時預りを素人メンバーで行った。そんなことをやれたことが不思議。思い出はつきない。「グリーンコープ大好き」がいつも心にあった。そうあり続けられたことに感謝している。多くのひとの出会いと日常が私を育んでくれたと思う。ありがとう。グリーンコープ生協ふくおか副理事長 一丸 直子



南と北の共生



パレスチナの女性たちの笑顔に光を見た

組合員によるパレスチナ訪問レポート

パレスチナとは

パレスチナは文化の十字路口と呼ばれ、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という3大宗教が生まれた地です。世界大戦でイギリスの三枚舌外交に翻弄され、イスラエルが建国され、パレスチナは分割されました。

した。PARCはイスラエル占領下の農村・農民を守るため、技術・生活向上につながる取り組み、学術的専門家の育成、経済的な自立などの取り組みを1983年から精力的にすすめています。

オリーブ畑見学と
収穫体験

3年のオスロ合意によってイスラエルとの共存の道を探りはじめましたが、ラビン首相の暗殺を機に合意は停滞。イスラエルは土地の接取と人植を繰り返して、人植地を守るために分離壁を張り巡らせパレスチナを分断しています。パレスチナの人々は自分の土地に行くこともできない状況で、経済的にも追い詰められています。

オリーブの木がどのよう
に栽培されているのかを見る
ために、PARCが指導
しているフォルカ村を訪ね
ました。石灰岩の岩肌が露
出する山間部の道路を抜け
ると、見渡す限りのオリ
ーブ畑です。直径1mの古木
もあり、先祖代々から守り
続けてきたオリーブ畑であ
ると説明がありました。収
穫は木を傷めないように手
摘みで行われます。村の人た

PARC訪問

ラマラにあるPARC（パレスチナ農業復興委員会）を訪れ、フェアトレード部門のサリームさんとシヤデイさんに会いました。サリームさんから「安全ではない状況の中で日本からわざわざ訪問いただいた。そのことで我々は孤立してないと思うことができた。それがとてもうれしい。日本のおみなさんのパレスチナ

フォルカ村の
女性グループと交流

「オリーブの木は生活のみでなく精神的な支えとなる神聖な木。イスラエルからいつ土地を奪われるか分からない。日本のみなさんが訪問してくれたことで私たちは世界から孤立してな



畑から取り除いた石で石垣を作り、段々畑を作っている



オリーブ畑までの車の通らない道はロバが活躍する

搾油工場の見学

「いことが分かった」。この言葉にパレスチナの人々にとってオリーブの木が生活の糧であることがにじみ出ていました。

収穫されたオリーブの実
はPARCの専用コンテナ

難民キャンプ内の
ハンダラ文化センターの
女性グループと交流

プリン難民キャンプは60年
続いており、現在約200
0人が暮らしています。病
院も学校もありません。男
子は15歳以上になると何か
しら因縁をつけられテロ予
備軍としてイスラエル兵に
連行されては、長期投獄さ
れることもあるそうです。

期、女性は18時間も

ブやアーモンドなどの苗木やこの貯水槽の費用をPA
RCが支援しています。

ブルカ村の
女性グループを訪問

ブルカ村にはメンバーが80人の大きな女性グループがあり、刺繍やトマト・キュウリなどの家庭菜園に取り

難民キャンプ訪問

日本に届くパレスチナのオリーブオイルが、いいいに手をかけられて作られていることを確認することができました。

難民キャンプ訪問

エルサレムのベイト・ジ

パレスチナ訪問感想

フォルカ村の女性グループとの意見交換で「海に向こうに自分たちのことを知って同じ気持ちを持っている人たちがいる。私たちは孤立してないと実感し心強く思う」と言われた。これは初日PARCのサリームさんが言った「自分たちは孤立していない。とてもうれしい」と歓迎いただいたことと重なり印象に残った。ほんとうにパレスチナの一人ひとりが平和をめざしながら暮らしていると感した。

田原 幸子さん

搾油工場ではP.A.R.C向けのものはきちんと分別がなされ、収穫したその日に搾油をしていた。品質の向上がここでも追求されていて、今、私たちが日本で手にするオリーブオイルはかなりの高品質であることが確認できた。以前の報告で、すぐに改善することとは難しいとのことだったが、3年間でここまで改善された人々の力に感動した。

林 真紀さん

パレスチナが持つオリーブは暮らしの中の象徴的な存在。オリーブを大切に守り育てることが人々の心の支えとなり生活の糧となる。イスラエルから痛めつけられながらも生きていく姿があった。強く生きていく母の姿、そして家族愛にあふれた人々。しかし、男たちは生きる糧を奪われている。世界から見放されていること、気にかけていることを伝えることが大切なこととして私の心に残った。

中島 明美さん

生産基盤が破壊され、理不

グリーンコープ共同体福祉委員会主催 福岡市

お母さんがもっと自分を好きになるように



講師 北村年子さん
プロフィール
1962年生まれ。ルポライター。自己尊重トレーニングトレーナー。女性・子ども・ジェンダーを主とした執筆やラジオ・テレビ番組、講演などの活動に励む。主な著書は「おかあさんがもっと自分を好きになる本」(学陽書房)「大阪道頓堀川「ホームレス」襲撃事件」(太田次郎社)

グリーンコープは子どもたちとお母さんが共に育ちあうことを目的に子育て応援に取り組んでいます。

2007年10月25日、子育て中のお母さんが、肩の力を抜いて楽しく子どもに向かいあえるようにと、北村年子さんを講師に学習会が開催され、組合員100人が参加しました。

講演の要旨を紹介します。

ホームレスな子どもたち

生まれてから3歳までの子どもと同じくらい愛と関心を必要とするのが思春期です。中学生の頃の反抗期は、最後の甘え、自立と依存がせめぎあい、子どもが生まれ直す時期でもあります。その時期に自分を表現できた子は幸せだと言えます。子どもはいろんな方法で親を試そうとしますが、残念ながら子どもとしっかり向きあわないまま放置してしまったり、すぐにカウンセラーや行政の機関に駆け込む親が多いようです。そのような家庭の子どもたちは、安心できる自由な居場所がないのと同じ、「立派なハウスはあってもホームがない」安心できる居場所がない「存在権を持っていない」状態と言えます。今この国にはそんな「ホームレス」な子どもが増えているのです。

立派な家やお金はあっても親から暴力を受け

ている子どもは少なくありません。また、両親の前ではいい子、例えば人権標語などで入賞するような子がいじめをしています。そのような子は自分の思いを説明したくてもできない、誰にも聞いてもらえないでいます。だからイライラして弱いものにあたる、悪循環なのです。

今の子どもたちがよく発する言葉に「イラつく・ムカつく・うざい」があります。一応感情を表す言葉ですが、「喜怒哀楽」でいうところの「怒」。その根っこには「さみしい」「つらい」「悲しい」といった柔らかな一次感情があるはず。その一次感情が何なのかを意識化してこそ、ほんとうの自分の気持ちを表現できます。反対に無意識にしていることは変えられません。

ほんとうの「自尊感情(自己尊重感)」とは

「ぼくは今、けっこう生きているのがつらい。誰かをいじめて、その人を不幸に落とし入れたい。他人を否定すれば自分がましに見える。自分に“価値”があると思えないから…。これは私が出会った、あるいじめっ子の言葉です。取材を繰り返す中でやっと聞いた言葉でした。怒りの根っこには自分を好きと思えない「つらい」気持ちがありました。

ほんとうの自尊感情とは何でしょうか？人と比べることではなく、欠点もあり弱点や短所もある「不完全な自分」を、あるがままに受け入

れ許せること、それが基本であると私は思っています。それは自分を甘やかすことではありません。自尊感情があるところに暴力やいじめは生まれません。「勝つこと」「がんばること」を強いられている子どもたちの「つらさ」は、さらに「勝てない」もの、「がんばらない」(ように見える)もの、より弱いものへの嫌悪や苛立ちとなり、弱さを否定する「自分いじめ」から、より弱い者への「他者いじめ」へと向かいます。

不完全であり、かけがえのない自分

「いい子ね、上手ね」。そんな風に子どもをほめていませんか？「上手ね」というほめ方ばかりしていると、「上手、下手」という評価にとらわれ、気にする子もいるでしょう。また「いい子」とは「親にとって、大人にとって、都合のいい子」「思い通りにしてくれる子」のことです。学校生活では「コントロールされやすい子」「従順な子」と言えるでしょう。そして私たちがつい言ってしまうがちな「がんばって」も実は相手を否定する言葉にもなります。今のままのあなたでは不十分ということが前提にあ

るからです。自分が「正しい」「楽しい」と思うことをやって生きてほしいと思うなら、その子にとっての「NO」を保障してあげることが大切です。それをしないまま「がんばること」「勝つこと」「いい子」でいることだけを求めるのは、大きな矛盾を子どもに強いていることになります。

上手にできない時や、がんばれない時もあるのだということを、自分にも他人にも許すことです。他人の失敗を許せないのは、自分が許せないことの裏返しなのです。

いいお母さんより、幸せなお母さん

子どもたちに「どんなお母さんが好き？」と聞くと「笑っているお母さん」と答えます。特に小さい子どもの子育てをしているお母さんは自尊感情が低くなりがちです。「よい母親になれることが許せない」と苛立ちが募り「子どもに優しくできない」「そんな自分が好きになれる」と多くのお母さんたちが言います。「～しなくちゃ」「こうでなくちゃ」から解放されることが優しさを取り戻す近道なのではないでしょうか。家の中がピカピカでなくても、

洗濯物がたまっている、「ま、いつか」と不完全を許し、笑顔でいられたら…。まず自分自身を受け入れ愛してあげること。これは簡単そう意外と難しいのです。だから一日一つ、意識的に自分のいいところをさがしてみてください。

自分を愛する幸せな大人のいる世界に、自分を愛せる幸せな子どもが育ちます。みなさんが幸せでありますように。そうして、すべての子どもたちが、幸せでありますように…。

スケジュール	
11月6日	成田→ウィーン→テルアビブ
7日	テルアビブ着 ラマラ (PARC事務所でオリエンテーション)
8日	PARC産地訪問 アルウムオリーブオイルびん詰め工場見学 フォルカ村訪問 アザレアル・ノバニ村搾油場見学
9日	ベツレヘム難民キャンプ訪問・エルサレム見学
10日	PARC産地訪問 ベゼリア村 ブルカ村
11日	PARCとの訪問総括 テルアビブへ
12日	テルアビブ→ウィーン→成田
13日	成田着



村の人と一緒にオリーブの収穫



ブルカ村女性グループと交流。前列中央吉田さん、後列左から2目林さん、3人目田原さん、4人目中島さん

るく笑顔で生き抜く女性たちの元気がパレスチナの原動力であることは間違いありません。

ベゼリア村の開墾プロジェクト訪問

標高700mにある村のオリーブ畑は石だらけ。自分たちの土地であると主張するために開墾を続けています。畑から取り除いた石で石垣を作り段々畑を作っています。一番高い場所にコンクリートの貯水タンクを設置し雨水を溜めます。それは井戸を掘ることも許されないパレスチナで唯一水を得る方法です。オリ

イスラエルから農地を荒らされ、道路を封鎖され、仕事を奪われたパレスチナの現状を見てきました。このような状況の中、女性たちは自立し力強く生活していました。農民や難民キャンプのみなさんはいつの日か当たり前の生活が戻ることを願っています。私たちは現状を日本のたくさんの方々に伝え、積極的に支援に取り組むことを約束してきました。パレスチナの復興を通じて全世界が人権を尊重し平和になること、それがグリーンコープのめざす「南と北の共生」であると確認しました。

吉田 文子さん

尽な抑圧の多いこの地で、オリーブを中心に農業が育まれ、女性たちが元気なことはパレスチナの強力な希望だと感じました。私たちの商品であるパレスチナのオリーブオイルは、人々の糧やかな暮らしと農業を支え、何より「あなたたちを応援する人がここにいます」というメッセージを発信できる食糧。この平和につながるオリーブオイルの利用が増え、パレスチナの「生きる」を多くの組合員と支えていきたい。また、そんな連帯がでるグリーンコープに誇りを感じている。



国産ジュース用(加工用)トマトの生産を応援しよう!!



ジュース用(加工用) トマトキャラクター

グリーンコープは国産農産原料にこだわり続けています。その一環として2005年からはじめた国産ジュース用(加工用)トマトを支援する取り組みも、今年度で3年目となりました。2007年11月26、27日、組合員を代表して田中裕子さん(グリーンコープ生協さが理事長)、小松実加さん(グリーンコープ生協ふくおか副理事長)が長野を訪ね、「生産奨励金」と「援農支援費」を生産者に届けました。

1 989年のトマト製品の輸入自由化に伴い、国内の加工用トマトの生産は急激に減少した。1980年頃には40万tあった収穫量が次第に減り、2002年頃には作付面積が激減、2005年には4.3万tとなった。また、日本の農業に共通する生産者の高齢化、後継者不足は加工用ト

マト生産者にとっても例外ではなかった。

国産原料に
こだわり続けて

目録を手渡しする田中裕子さん(右)と小松実加さん。JAグリーン長野の生産者、春日和夫さん(左)と島田準一さん



グリーンコープのトマト加工製品(ジュース、ケチャップなど)のすべてに国産原料を使っている。3年前トマト加工製品の原料トマトの確保が難しい状況に直面したことを受けて国産の加工用トマトを守ろうと取り組みを開始した。トマト加工製品に5円から10円の奨励金を上乗せし、生産者を応援する「生産奨励金」制度や加工用トマトの青果企画による「援農支援費」の取り組みだ。それとおして産地や生産者を応援することを目的としている。

2006年度は取り組みの成果もあり長野県の産地では収穫量が14%アップとなったが、2007年度は作付面積が12%減少している。夏の最も暑い時の収穫時期に収穫する人の数が不足することが原因の一つであることから、今回特に収穫量の多い3農協(JANAの・JAあづみ・JAグリーン長野)に「援農支援費」を届けた。収穫時期の雇用件数費の一部として活用してもらうことになって

「大好きなトマトジュースを利用することでいつも応援しています。生産者のみなさんへ感謝の気持ちを直接伝えることができて感動しています」と田中さんは挨拶の後、目録を渡した。小松さんは「喜んでいただいて感謝しています。この気持ちをもち帰り、さらに組合員に広く呼びかけていきたいと思っています」と感謝の気持ちを伝えた。生産者からは「定年退職してからトマト栽培をはじめた人もいます。奨励金の話を聞いています」「女性生産者のグループも生まれつつあります」と積極的な取り組みのようすが報告された。各農協からは2007年のトマトの生育・収穫の状況が報告された。7月の大干ばつに続き、夏の後半の大雨による冷夏、以降の高温多湿という異常気象の中で収穫期を迎え、収穫量は大きく減少した。「厳しい状況の中でこのように温かい奨励金、支援費はほんと

加工用トマト生産者数と生産奨励金の額

J A 名	2007年 生産者数 (名)	作付面積 の前年比 (%)	支払い額(円)
JAながの	132	78.9	3,857,200
JAグリーン長野	47	92.5	734,200
JAあづみ	81	98.1	3,429,800
JA信州うえだ	1	96.4	149,600
JA志賀高原	5	75.9	179,800
JA中野市	8	103.3	178,000
JA北信州みどり	5	93.7	147,800
(長野県合計)	279	87.2	8,676,400
奈良県	1	111.1	250,000
和歌山県	20	119.6	186,390
総 合 計	300	88.3	9,112,790

生産者への援農支援費

J A 名	支 払 い 額 (円)
JAながの	963,200
JAあづみ	593,145
JAグリーン長野	170,560
合 計	1,726,905



生産奨励金の対象トマト加工製品

うにありがたい。グリーンコープの組合員さんの声に意欲がわきます」と感謝の気持ちが届けられた。今後もトマト加工製品を利用することで連帯していくことになる。

3年間の取り組みによって産地との関係は深められてきている。この取り組みを継続することが日本の農業を守ることに繋がっていくに違いない。

グリーンコープは今後も国産原料へのこだわりを強化していくつもりだ。

募集 2008年 シャボン玉月間ポスター

〔募集要項〕

でき上がり寸法: B3(横約36cm 縦51cm)
色など: カラー
(紙、データ(PDF添付))
必ず入れる文字: (2008年キャッチコピー)
「からだも自然もせっけん大好き!」
※住所、氏名、電話番号、加入生協名を明記する

内 容:
「石けんを使う暮らしの提案」
「水環境保全についての提案」など
締 切 り: 2008年2月23日(必着)
(メールまたは郵送で)
採用作品決定: 2008年2月末
賞 金: 3万円(採用作品のみ)

(作品の送り先・問い合わせ先)

〒261-0011 千葉市美浜区真砂5-21-12
生活クラブ生協千葉内 協同組合石けん運動連絡会・事務局
TEL 043-278-2701 FAX 043-279-7490
Eメール kazuki.maeda@s-club.coop

お詫びと訂正: 1月号の掲載に誤りがありました。

1面「グリーンコープの輪・和・環」プロフィール6行目
(誤)「グリーンコープ生協福岡・北九州が合流」→(正)「に合流」
2面「グリーンコープ生協生協交流会」組合員参加者数について
(誤)「102人」→(正)「99人」
(誤)「全部で146人」→(正)「全部で143人」
7面「子どもたちの未来のために」(誤)「No.5」→(正)「No.6」
以上、お詫びして訂正いたします。

「原子力発電による
ゴミ(死の灰)」について

「死の灰」とは、原子力の燃料であるウランが燃える(核分裂する)時にできる核分裂生成物のことだ。

私たちは電気がほしいといって原子力発電を動かしながら、毎年、広島型原爆約5万発に相当する死の灰を出しています。日本で原子力発電がはじまって以降、出された死の灰の総量は広島型原爆100万発分に達しています。

人類は死の灰を出したが、死の灰を無毒化する力を持っていません。およそ100万年に渡って人間の生活環境から隔離するしかありません。日本では、青森県六ヶ所村の貯蔵施設に一時的に貯蔵し、当座をしのいでいます。既に60年以上も研究が続いているにもかかわらず、原発が出す廃物の処分方法を見出せないまま今日まで生きてまいりました。

私たちはこのような膨大な死の灰の塊という大きな負債を、未来の子どもたちにこれ以上残すべきではないと考えます。

「原子力とは一体何なのか?」講師・小出 裕章さん
2007年2月22日グリーンコープ生協みやぎでの講演録より引用

グリーンコープ共同組織委員会



No.7